

令和6年1月20日
大阪府教育庁文化財保護課

かみがいと 上垣内遺跡現地公開資料

はじめに

上垣内遺跡は、枚方台地の南西端部、讃良川を南方に望む丘陵と、その斜面に位置する遺跡です。周辺には国指定史跡である高宮廃寺や石宝殿古墳、府指定史跡である忍岡古墳など、古墳時代から飛鳥時代の著名な遺跡が数多く所在しています。

近年、上垣内遺跡内に計画された道路建設に先立ち、大阪府教育庁文化財保護課によって平成25年度から継続的に発掘調査を実施してきました。これまでの調査では、古墳時代の竪穴建物や奈良時代の掘立柱建物が確認されています。今年度は、大阪府文化財センターも発掘調査を実施し、横穴式石室が見つかりました。

大阪府の調査地は東西に長く、幅約20m、長さ約260mに及ぶ範囲を令和5年4月から調査してきました(図1)。今回公開する調査区は、讃良川と藤谷川に挟まれた丘陵の先端付近にあたります。

調査成果

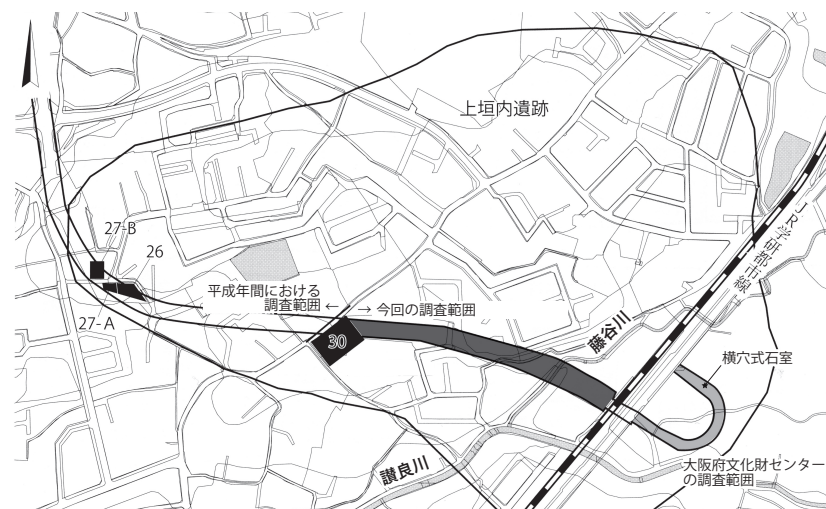
今回の調査区では、掘立柱建物1棟が検出されました(写真2)。この建物の桁行は3間(約6.5m)、梁行は2間(約4.2m)であり、床面積は約27.3㎡となります。これは古代の建物としては平均的なサイズといえます。建物の主軸は西に約14°振れており、地形にあわせて建てられていることがわかります。

また、建物の柱掘方から鍋の取手が出土しており、これの年代観から飛鳥時代に建てられたことが判明しました。詳細な時期は確定できませんが、文化財センターが発掘した石室とほぼ同時期にあたるかと考えてよいでしょう。さらに、柱穴にはすべて柱を抜き取った痕跡を確認できます。そして、その抜き取り穴の中には焼けた壁土や炭化物が多量に含まれており(写真3)、この建物は火災にあって廃絶したと推測されます。

建物が廃絶した後は、讃良川へ向かって傾斜する地面に大規模な盛り土をおこない、平坦化しています。おそらく、耕作地を獲得するために大規模な造成工事をおこなったと推測されます。盛り土の中には飛鳥時代の土器が多く含まれ、また、奈良時代の土器もわずかに含まれていました。このことから、調査区周辺の飛鳥時代の地形を奈良時代に削平し、盛り土をおこなっていたと考えられます。

まとめ

上垣内遺跡の位置する旧讃良郡域は飛鳥時代の遺構・遺物があまり多くはなく、これまでの調査で遺構が集中的に見つかっているのは四條畷市の正法寺周辺と、寝屋川市の高宮廃寺周辺に限られています。そうした状況にあって、今回見つけた建物からは、この周辺に飛鳥時代の集落が存在した可能性を予見させます。また、奈良時代において大規模な造営工事をおこない、耕作地を獲得していることなど、今回の調査によって地域の歴史を考えるうえで重要な成果を得られたと言ってよいでしょう。



【図1】 既往の調査地点と今回の調査範囲
(大阪府教委2019『上垣内遺跡Ⅲ』を基に作成)



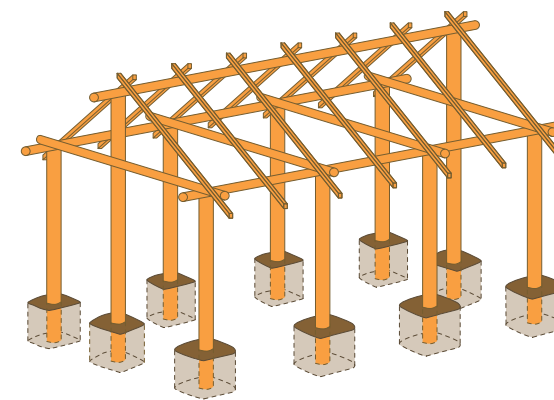
【写真1】 上垣内遺跡遠景(南西から)



【写真2】 掘立柱建物完掘状況(西から)



【写真3】 建物の柱穴(右側の黒色部が柱抜き穴)

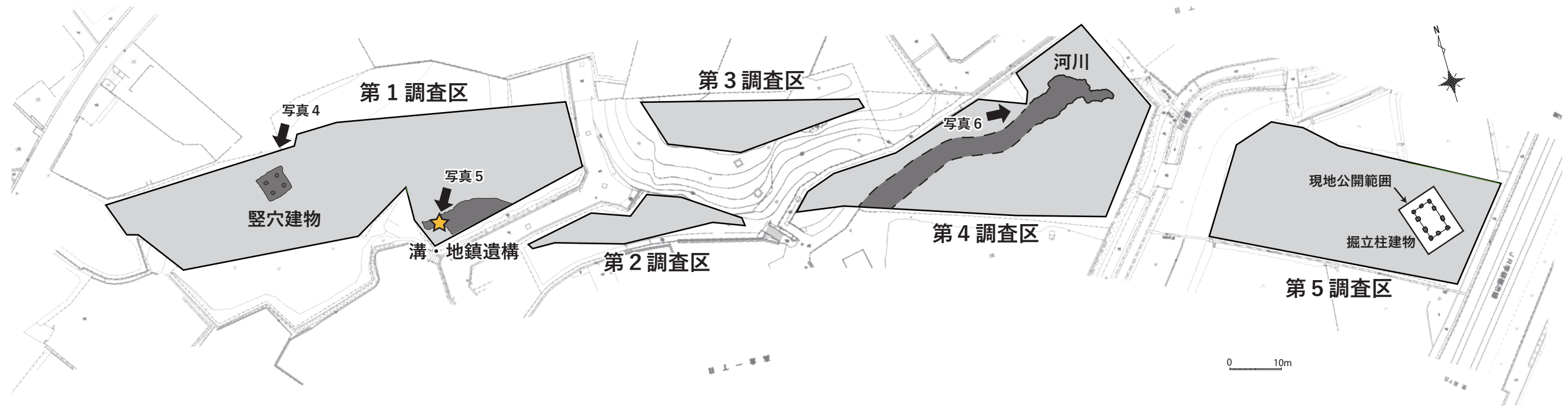


【図2】 掘立柱建物の模式図



【大阪府文化財保護課公式 SNS】

令和5年までの主な調査成果



【写真4】古墳時代後期の竪穴建物

第1調査区は大半が丘陵の上に位置し、地形的に安定していたため居住に適しており、竪穴建物1棟を確認できました。東西幅約4.8m、南北幅約5.1mを測り、やや横長の隅丸方形を呈します。面積としては約24.5㎡となります。

柱穴は4つ確認され、そのうちのひとつの柱掘方からは、完形の須恵器が出土しました。その年代観によって、古墳時代後期にこの竪穴建物が建てられたと判明しました。

また、北辺の中央部には焼土が堆積しており、カマドが据え付けられていたと考えられます。ただし、廃絶時にカマドは破壊されており、その形状などはよくわかっていません。



【写真5】奈良時代の溝および地鎮遺構

第1調査区のうち、竪穴建物の位置する丘陵から一段下がった場所で、人工的に掘削された溝が確認されました。中心部の幅は約4m、深さは約1.5mを測り、西の丘陵部から東の谷へ向かって水を流していたと考えられます。溝底には大量の土器が投棄されており、これらはいずれも奈良時代に属します。溝内の土層を観察すると、奈良時代に溝が掘削された後は、自然の作用によって徐々に埋没していったことがうかがえます。

また、図面の★印で示した部分には、溝底からさらに掘りくぼめられた部分があり、そこに須恵器の壺が据えられている状況を確認しました。住宅を建てる前の地鎮祭のような、土地の神様に対する祭祀関連の遺構である可能性が想起されます。



【写真6】古墳時代中期～飛鳥時代の河川

第4調査区において、北東から南西方向に向けて流れる河川跡を確認しました。この河川は位置などからみて、第4調査区の東を流れる藤谷川と関連すると考えられます。土層の観察によって、この河川は人工的に埋め立てられていることが分かっており、埋めた後の平坦面に掘立柱の倉庫が建てられていることなどから、流路の付け替えがなされた可能性を想定できます。

河川として機能した時期の堆積層からは古墳時代中期～飛鳥時代にかけての土器が出土しており、埋土からは飛鳥～奈良時代の土器が出土します。また、特筆すべき遺物として、埋め立て土の中から、飛鳥時代の土馬が挙げられ、遺跡の性格を考えるうえで重要な手掛かりとなります。